

コロナ禍の続く二〇二〇年十月三日、この春に竣工したばかりの横浜市役所のアトリウムで、「M meets M」と総称されたふたつの建築展、村野藤吾展・横文彦展の合同オープニング・セレモニーが行われた。残念ながら、出席者全員がマスクを着用し、関係者のスピーチのみのささやかな会だったが、九月六日に九二歳を迎えた横文彦や村野の遺族らが集う貴重な時間となった。二人の建築家の頭文字を用いた展覧会名には、フライヤーの開催趣旨に次のように綴られたように、ある意味が込められていた。

「M meets M。ちょうどひと世代の差がある二人の建築家が、ここ横浜の街で出会います。大規模再開発が決まり、一部は保存されますが、惜しまれながら姿が消えていく村野の旧庁舎。一方、六五〇〇人の職員を包括し、横浜の新しい発信基地としてスタートした横の新庁舎。二〇二〇年、この新旧のリレーが展開されています。この機を捉えて、二人の日本を代表する建築家の展覧会を開催したいと思います。」

この言葉どおり、一九五九年に村野藤吾の設計により竣工し、約六〇年の長きにわたって横浜の戦後復興を見守ってきた旧・横浜市庁舎は、この五月二十二日にひっそりと閉庁した。発表された再開設計画では、南東側の八階建ての細長い行政棟はホテルとして保存活用されるものの、議会棟などはすべて撤去される予定である。その跡地には、商業施設やオフィス、大学を含む巨大な複合施設として、地上三〇階、高さ約一六〇mの超高層ビルが建設される。また、それと連動して、隣接地でも、商業施設とオフィス、高級賃貸マンション等からなる

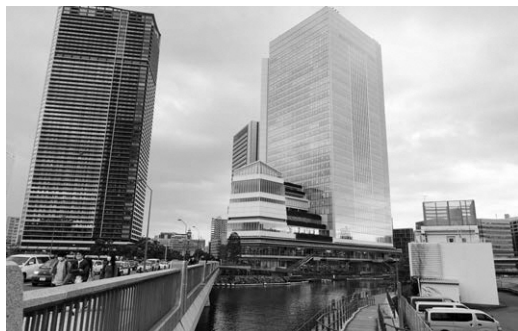
地上三十一階、高さ約一六〇mの超高層ビルが建つという。おそらく、数年後には、これらの超高層ビルの出現によって、日本大通りや山下公園に象徴されるように、比較的落ち着いた街であった関内駅周囲の風景は激変し、適切な街全体としてのスケール感が失われてしまうだろう。もし村野が生きていたら何と云うだろうか。というのも、半世紀に及ぶ設計活動の中で超高層ビルを手がけることのなかった村野は、次のような言葉を残しているからだ。

記憶の建築

松隈 洋

横浜市役所 2020年

『アーバニズムのいま』とその行方



北西側から見た新庁舎の全景



桜木町駅へと続く人道橋からの光景

ながら、種々には危険性をはらむ。また高層建築は、都市問題の解決の唯一の方法ではない」と註まで書き足していたのである。さて、その旧庁舎に代わって、隣の桜木町駅前に竣工したのが、横文彦のデザイン監修による新庁舎である。旧庁舎から六〇年、横浜市の人口は三倍に増え、今や全国最多の三百七十六万人が暮らす巨大都市になった。そのため、新庁舎は約五倍規模の地上三三階、高さ一五五mの超高層ビルに姿を変えた。だが、旧庁舎と立地条件が大

その意味で、新庁舎に求められたのは、巨大都市・横浜の公共性の新たな指針と典型を示すことだった。今回訪れてみて、横が長年求め続けたパブリックスペースが、ウォーターフロントの立地条件を巧みに取り込んで結実していることを確認できた。しかし、周囲を見渡せば、無粋な超高層マンションが眼前に建ち塞がり、都市デザインは制御不能に陥っているように思えた。この五月に出版された著書『アーバニズムのいま』の中で横は次のように記している。

「私は『漂うモダニズム』の中で人間の振舞い、態度、姿勢を表現する言葉として 'decent'、'decency' という言葉が一番適切ではないかと述べている。(中略) 社会的に見苦しくない姿勢としてこの言葉を使っている(中略) 重要なのは、そうした一人ひとりの振舞いの背後にその人の倫理感が存在していることである。(中略) 国家を始めとして、あらゆる組織が必ずしも我々が納得する 'decency' という倫理感に基づき行動していないのをいやというほど見ている。(中略) 日本の建築界の組織体の行動は真に建築界全体の倫理性に基づいているか否かの問いに対して、Noと答えざるを得ない。」

「私は高い建物もどうかと思うのです。低いと平面的に広がる。そのほうがよいと思う。建物を高くするということは、私のいう地相を過度にすることで、土地に限度をこえた負担をかけ、その結果地相を破壊する。」(「わたくしの建築観」『建築年鑑』一九六五年美術出版社)

さらに、没後出版された著作集への収録にあたり、村野は「高層建築は高度消費につ

大きく異なっていた。もともと桜木町駅の海側は、三菱重工の造船所や国鉄貨物支線の高島操車場があり、大岡川を挟む対岸には生糸・絹製品貿易で栄えた横浜港を象徴する検査所や倉庫群が建ち並んでいた。その後、一九八〇年に本格的に始まった「みなとみらい二十一」計画により、風景は一変する。新庁舎もその整備された地区にあり、隣地には同じ横が手がけた旧・横浜銀行本店の一部を曳家して組み込んだ横浜アイランドタワー(二〇〇三年)が建っている。

横浜を含め、日本の都市はどこへと向うのだろう。横が強く求めた「人々の心と眼をなぐさめ、そこに生活することの深い欲びを与える」豊かで愉しい都市を育むことはできるのか。アーバン・デザインの先駆地であった横浜の現実を前に、改めて横の言葉の意味を噛み締めておきたい。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士(工学)。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。